

会 議 録

1 会議名	平成29年度 第1回富士見市産業振興審議会
2 開催日時	平成29年10月26日(木曜) 午後2時00分から午後4時00分
3 出席者名 (順不同・敬称略)	猪瀬 典夫 会長、田中 正伸 副会長、横田 昌則 委員、荒井 正信 委員、飯塚 尚廣 委員、増淵 健二 委員、西本 則子 委員
4 傍聴者	0名
5 次第	<p>【第1部 委嘱状の交付式】</p> <p>1 開会</p> <p>2 委嘱状交付</p> <p>3 市長あいさつ</p> <p>4 閉会</p> <p>【第2部 富士見市産業振興審議会】</p> <p>1 開会</p> <p>2 会長・副会長選出</p> <p>3 諮問</p> <p>4 審議事項</p> <p>① 富士見市産業振興基金を活用した具体的な事業実施について</p> <p>② その他</p> <p>5 閉会</p>
6 議事内容	<p>【第1部 委嘱状の交付式】</p> <p>1 開会 進行：産業振興課長</p> <p>2 委嘱状交付 市長から委嘱状を交付</p> <p>3 市長あいさつ</p> <p>4 閉会</p> <p>【第2部 富士見市産業振興審議会】</p> <p>1 開会</p> <p>2 会長・副会長選出</p> <p>(1) 会長・副会長の選出について</p> <p>富士見市産業振興審議会条例第4条第1項の規定に基づき、互選により、会長に猪瀬委員、副会長に田中委員を選出。</p> <p>(2) 会長あいさつ</p> <p>(3) 議長について</p> <p>同条例第5条第1項の規定に基づき、猪瀬会長が議長となり、議事進行。</p>

	<p>3 諮問</p> <p>市長から会長に諮問書を手交。</p> <p>4 審議事項</p> <p>① 富士見市産業振興基金を活用した具体的な事業実施について</p> <p>審議前に事務局から審議会を設置目的と富士見市産業振興条例について説明。</p> <p>(1) 富士見市産業振興基金について</p> <p>配布資料に基づき、事務局から富士見市産業振興基金の内容や、今年度基金を活用して実施予定の事業について説明。</p> <p>(2) 富士見市産業振興基金を活用した具体的な事業実施について</p> <p>配布資料に基づき、他市における産業振興分野の基金活用方法について説明。</p> <p><b>【質疑・意見等】</b></p>
委員	<p>近年、農業者の高齢化と後継者不足が課題となっている。農機具の購入には多額の費用がかかるため、購入費用に対する助成があるとありがたい。また、意欲ある後継者に対する支援も併せて検討していただきたい。</p>
会長	<p>意欲ある担い手への支援も大切だが、農業への関わり方のバリエーションを増やしていくことも必要だと考えている。</p>
委員	<p>生産、加工、販売までを一体的に行う6次産業化という手段もあるが、加工所1つ作るのにも様々な制約があり、うまくいかないのが現状である。</p>
会長	<p>農業者だけで6次産業化を進めていくという選択肢もあるが、農業、商業、製造業の農商工連携により実現していくという方法も考えられる。様々な課題はあると思うが、実際に製造業の立場から見ると、こういった考えはどう感じるか。</p>
委員	<p>具体性が無いと答えにくいですが、農業が仕事の中で何をどう使っているのかを学ぶことで、製造業が関われる部分が出てくる可能性はある。</p>
会長	<p>食品製造業の方が参加すると農業の皆さんは取組みやすいのかもしれない。富士見市で今年開発された梅酒はどのような経緯で誕生したのか。</p>
事務局	<p>梅酒については、日本酒の消費量が低迷する中、新しい商品の開発という側面と、地のものを使用することによるふるさと意識の喚起を狙って開発に取り組んだという経緯がある。酒販店組織の発案により、既存の縄文海進と市内水子地区の梅をコラボレーションすることで、新しい商品の開発にたどり着いた。</p>
委員	<p>工業界としては、基金を活用した支援策はありがたいが、各事業所でニーズがバラバラなため、意見の集約は難しいと思われる。金融支援や販路開拓支援などのトータル的な支援がよいのではないか。また、特色ある取り組みとしては、川崎市では休眠特許を活用した製品や技術開発への支援を行っている事例もある。</p>
会長	<p>展示会出展に対する支援へのニーズはあるか。</p>
委員	<p>市内工業の傾向として、その事業所独自のオリジナル製品の製造、販売ではなく、顧客から依頼されて製造するといった構造であるため、展示会での製品アピールは難しい部分がある。</p>

会長	市の産業の魅力を発信していくことで、市民がまちに愛着を抱き、定住性が増したり消費が活発になっていくことが期待される。大田区などでも町工場が共同で商品開発に取り組んで盛り上がっているケースもあるため、休眠特許を活用して新しい商品開発に取り組んでいくというのは非常に面白いアイデアだと思う。
委員	休眠特許も膨大な数があるため、有望な特許を探すために専門のコンサルティングを間に挟む必要がある。そのため、コンサルティング費用や特許使用料などを支援してもらえると非常に取り組みやすくなる。
委員	工業者としては優良な工場適地を探すのに苦労している。自分の会社でも新しく工場を建てる際に土地を探していたが、最終的には県外に建てる結果になった。そのため、市内にも工業団地のようなものがあると工業の振興には効果があると思われる。
委員	富士見市は、都心に近いが水田や畑などの優良な農地が残されており、東京という大消費地に隣接していることもあって、農業は将来有望な産業だと考えている。工業者の中でも、工場設備や生産管理のノウハウを活用して農業分野に参入している企業もあるため、富士見市でも農業者と工業者が連携して何かやれたらと思う。
委員	市内には農家や農協の直売所が多くあり、既に地産地消の取組みが行われている。特にららぽーと富士見内の農協が運営する直売所に出荷している生産者の中では、良い物を作ればきちんと売れるという事が浸透してきたため、買ってくれる人が近くにいるというのは我々の強みだと考えている。
会長	ものづくりの場所として、富士見市の立地環境はどう感じるか率直な意見を伺いたい。
委員	市内には工業団地などが無いため、立地環境としては難しいものがある。また、昨今の工業界では人材の確保が課題となっているため、地元の人を採用する意味でも人が住みやすく、今後も人口が増えていくようなまちづくりを進めていって欲しい。
委員	農業が抱える課題としては、現在使用している農機具が壊れた際の対応である。農業機械は高価なため、買い直す去何百万という費用がかかる。その割にお米などは価格が低く、農業は儲からない体質になってしまっている。こういった問題が後継者の育成にも影響を及ぼしていると感じている。
会長	いかに市民に愛着を抱いてもらい、生活しやすいまちにしていくのかが市の大きな目標であると思う。そのためには、農業体験や工場見学などを通じて産業に触れてもらう機会を提供することで市の産業振興にも繋がってくるのではないかな。
委員	昔からのお店も少なくなり、商店街や個店は厳しい状況にあるが、商工会や商店会連合会では、一店逸品運動や賑わいづくり事業、まちバル☆ふじみなどに一生懸命取り組んでいる。
委員	商業活性化の取組みに対して行政からは補助金などで支援をいただいているが、今回新たに創設された基金は既存の制度の延長線上のものなのか、それとも全く新しい支援の形を目指しているのかを教えて欲しい。
事務局	事務局の考えとしては、新たな取組みやチャレンジに対して基金を活用していきたいと考えているが、本審議会において、基金をどう活用していけば市内産業の振興につながるかを委員の皆様自由に議論していただければありがたい。
会長	産業振興条例においては事業者自らの創意工夫と自主的な努力が期待されているため、市内の事業者自らが考えた上で、これをやりたいというものに対して基金を使って応援していく形になると理解している。

委員	梅酒の開発も良い取組みだが、市の課題として知名度の低さがある。そこで、メディアが飛びつきそうなインパクトのある名物やグルメを開発できれば、地元商業者もそれらと関連させて盛り上がりを仕掛けていくことができると思う。
委員	富士見市ならではのものがあるとよい。特に子育て世代が増えているため、キラリ☆ふじみや市内の公園などを活用して、子供向けの農商工体験イベントなどが出来たら面白いと思う。
委員	近隣の大学や富士見高校において、市への関心を高めるための授業の一環として、市の産業や企業をPRできる機会があれば、その後の就職などに繋がっていく可能性もあるのではないかな。
委員	飲食店としては、市の特産品である野菜や果物は、メニューにしてもインパクトが薄く、使い辛い側面がある。また、年間を通じての安定的な供給が難しく、季節ものになってしまうのも課題である。
会長	ららぽーと富士見によって市の知名度は向上し、市民にとっても暮らしやすい環境になったと思う。ただし、ららぽーとは富士見市だけにある訳ではなく、これから続々と後続の施設がオープンすることで、市の優位性は徐々に失われていくことが予想される。だからこそ、名物や特産品などの富士見市といったらこれ！というものを産業界が一丸となって開発していく必要性を感じている。
委員	過去に梨ジャムなどの加工品に挑戦したことがあったが、加工の手間とコストが大きく割に合わなかった。特に梨はほとんどが水分であるため、特産物によっては加工に不向きなものもあると思う。
委員	名物の開発については、誰にとっての名物なのかという視点が大事だと思う。市では若い子育て世代が増えているが、この世代が何を欲しているかというニーズを読み取ってあげることが重要ではないかな。
委員	新しく市にやってきた若い子育て世代は、地域の情報に詳しくないため、市内で頑張っていたり、こだわりをもった魅力あるお店の情報を発信してあげること、そういった層に来店してもらう仕掛けづくりが必要だと感じている。
委員	杉並区でも成功事例があるが、育休中のママがイベントの企画やお店のポップづくりなどで商店街の活動をサポートする試みなども面白いと思う。
委員	市内にはサイクリングコースや農家カフェなどの素敵なスポットが既にあるため、これらを取り入れたストーリー性のある市独自のライフスタイルを提案することで、市のイメージアップや外部からの誘客に繋がってくるのではないかな。
委員	市内には魅力ある良い素材が既にあるため、訴えたいターゲット層を決めて、魅力をどう伝えていくかを検討することが大切である。その結果、市の情報に触れる機会が増えれば、商品やサービスに対する信頼感が増して、リピーター化に繋がっていくのではないかな。自分の考えでは、富士見市は今あるものだけでも充分勝負できるポテンシャルがあると考えている。
会長	これまで出された意見をまとめると、新たに引っ越してきた子育て世代を中心とした若い世代に対して、市の産業を知ってもらい、親しんでもらうにはどうすればよいかというのが大きなテーマだと感じた。また、長い目で見ると、現在市税収入に占める法人市民税の割合は多くないが、基金を活用した産業支援を行っていくことで、法人が納める税収を増やしていくことが大事である。これからの富士見市は首都圏のベッドタウンという位置づけから脱却し、産業が光り輝くまちを目指していくことが必要だと感じている。

委員	市民との接点を増やすのは大事なことだと思うが、小売業やサービス業に代表される商業者と違い、市内の工業者の大部分は企業が取引相手となっているため難しいと感じる。
会長	例えば、現在工場見学などの産業観光がブームになっているが、工業製品を造る過程や職人の姿などを見たいと思うニーズもあるのではないかな。
委員	商工会の工業部会でも企業訪問企画などを考えたことはあるが、現状各事業者は自分の仕事で手一杯で余裕がない状況である。ただし、市内で面白い取組みをしていたり、高い技術力を持つ企業が増えてくれば、そうした企業を見学したいという需要も出てくるのかもしれない。
会長	基金の活用方法として、市内の事業者の売上増加や生産量の拡大、技術力向上などに効果があると見込まれる施策の財源として使う方法と、市民に対して市内産業の認知度を向上させ、親しみを抱いてもらうための施策に使うという2パターンの案が出ているが、他に何か意見はありますか。
事務局	本日欠席している星野委員からの意見を紹介します。一つ目は農機具の購入に対する支援です。水田農業において、田植え機やコンバインは必要な機械ですが、故障時や老朽化による更新費用の負担が大きいため支援してはどうかという事でした。また、畑作農家においては、野菜の洗浄機などの機械を導入することで労働時間の短縮につながり、空いた時間を野菜の加工などに使えるため効果的ではないかという内容でした。
事務局	二つ目は、野菜のポイントシール事業への支援です。具体的には、農家の直売所やスーパーの地場産品コーナーで販売されている市内産の野菜にシールを貼り、それを規定の枚数集めた方には抽選で市の特産品などをプレゼントするという内容です。既に同様のキャンペーンを三芳町で実施していますが、他産地の農産物との差別化を図る上で有効な手段ではないかという意見でした。三つ目は、先進地への視察研修に対する支援との事でした。
委員	稲作は、稲を刈る機械、耕耘機、田植え機、どれか一つ欠けても営農できなくなってしまう。現状、1つの機械で全ての機能を備えたものはないため、農業機械への補助は、農家に営農を継続してもらい耕作放棄地を予防するという観点でも有効な支援策だと思う。
会長	市内産野菜を購入して集めたシールを応募することで、市内で農業体験が出来るといった特典も面白いと思う。市内の農業を知ってもらう取組みとしては、地産地消や直売がメインだが、三芳町の芋街道や川越の芋掘り体験のような農業観光を推進していくという視点もある。
委員	若い世代が何を面白いと感じ、どんなニーズがあるかについては、地域の若いママたちに聞いてみると良い意見が出てくるかもしれない。
委員	地域の小学校の行事として、定期的に3年生向けの梨狩り体験をしていたが非常に好評だった。諸事情により残念ながら今年から中止になってしまったが、楽しみにしていたお母さんが直接梨を買いにくるということもあった。
会長	本日の審議内容をまとめると、農業については、後継者の確保と農作業の効率化、農産物の付加価値の向上に加え、地域住民と接する機会をどう作るかというのが話し合われた。工業においては、雇用にも繋がる市のものづくりをどう振興していくか、また法人税収のアップを念頭においた企業が立地しやすい環境の整備について、そして農業と同様に、市のものづくりを市民に理解してもらう機会の創出がテーマだった。商業と商店街においては既に色々な取組を行っているが、基金を活用した新たなチャレンジの検討について、また、子育て世代への対応などが主な内容になった。市民との接点の創出については、日々消費者と接している商業者が一番取り組みやすいのではないかと感じた。最後に、市の産業振興には、富士見市と言えばコレ！という名物が必要であるため、何か市のブランドになるものを産業界から産み出していくといった取り組みが重要だと感じた。

